
君に咲く花

なかゆんきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に咲く花

【Nコード】

N5880U

【作者名】

なかゆんきなこ

【あらすじ】

藤堂平助は悩んでいた。ものすごく悩んでいた。

密かに（周りにはバレバレだが）想いを寄せる幼馴染、千鶴の誕生日プレゼントが決まらないのだ。

薄桜鬼、現代学園パロ設定で平助×千鶴のお話です。（つきあってはいません）

（前書き）

現代学園パロで、平助×千鶴なお話です。（付き合っ
てはいません）

藤堂平助は悩んでいた。

それはもう、ものつすごーく、悩んでいた。

「…はあー」

深くため息を吐いて、自分の机の上につつ伏せる。

時はもう放課後。昨日の夜からずっと悩み続けているが、それでも答えは出ない。

「ちよつと、ため息それで何回目？ 正直ウザいんだけど」

隣から容赦のない言葉を叩きつけるのは、級友の沖田。彼は携帯をいじりながら、平助を一瞥する。

「…だってよー、総司…。オレ、わかんなくて」

「何が？」

平助が何に悩んでるんだか、さっぱり解らないんだけど、と沖田。

「う」

「僕はエスパーじゃないんだから、話してくれなきゃちゃんと相談に乗れないよ。ま、乗るかどうかは話の内容によるけど」

「ううー…。じ、実はな総司…」

「うん」

「もうすぐさ、あいつ…の誕生日なんだ…」

「うんうん、…って、え？」

「だから、千鶴の誕生日なんだよ。三日後」

「へえー（それは良いことを聞いたな…）」

心無しか、沖田の眼光が鋭くなったような気がしたが、平助は気にしないことにした。

「それでさ、今年は何をやるうかなくて。あいつ、何をやっても喜んでくれるんだけど…」

「ふうん。そんな毎年プレゼントあげてるんだ。さすがに幼馴染はウザ…違うね」

（今ウザイって言いかけなかったかコイツ…？）

「で、でもさ。毎年喜んでくれるから余計に、今年はもつと喜ばせたい…って思ってたさ…」

でも何をやってたらしいかわかんないんだよー！ と叫ぶ平助。

「ちなみに、今までは何をあげてたの？」

「う、と、確か去年はCDで…一昨年は…DVD？」

どちらも丁度千鶴が欲しがっていた物だ。

「でもあいつ、今年は欲しいCDもDVDももう自分で買っちゃってるし、それに毎年似たような物贈るのも芸がないっつーか」

「確かに芸が無いね」

「だろー？ でもさ、オレ…女の子が欲しがる物なんて、わかんねーし」

「本人に何が欲しいのか聞けばいいんじゃない？」

「ばっ！ そんなのこの時期に聞いちまったら誕生日プレゼントだつてすぐバレんだろー！」

「あ、隠してるんだ一応」

（でも平助がこれだけ挙動不審なら、さすがの千鶴ちゃんも気付くんじゃないかなー）

平助の幼馴染は結構鈍い。特に自分に寄せられている感情には気付いていないようだ。

「なあ総司。おまえって結構女子にモテるだろ？ なんかさ、こういうイイ感じに女の子が喜びそうな物とか知らないか？」

頼む！ 教えてくれ！ と手を合わせて頭を下げる平助に、
「………！ ……うん。いいよ」

しばらく考え込んだ後、沖田は頷いた。

珍しく、満面の笑みを浮かべて。

その日の放課後、平助は沖田に教えてもらったシヨップの前で一人立ち竝んでいた。

（うっ、なんだよココ…。すっげー入りづらい…）

それは、いわゆる女の子御用達のファンシーシヨップ。

なんでもこの店で売っている『チヨコラツチュ』とかいうキャラクターのグッズが、女子高生の間で流行っているのだそうだ。

（結界でも張ってあんのかっつー感じだよな。男なんて一人もいないじゃん…）

ウインドウ越しに店内を覗き見ても、中にいるのは女、女、女、女ばかり。男性客の姿は無い。

平助とて千鶴のプレゼントを選ぶのであれば、一生足を踏み入れることも無かった場所だろう。

（で、でも…、あいつのためだし…）

平助はプレゼントを受け取って「ありがとう、平助君」と微笑んでくれる千鶴のことを思い浮かべ、奮起して店内に足を踏み入れた。「うわ…」

入ってみると、予想以上の世界が目の前に広がっていた。

所狭しと並べられている可愛いグッズ達。平助には使い道の想像もつかないそれらは、得体の知れない威圧感を醸し出している。

（っ！かオレ、『チヨコラツチュ』ってどんなキャラクターか知らねーし…）

うっかりしていた。

沖田はこの店にくればすぐ解るよ、などと言っていたが、色々なキャラクター物がありすぎてどれがどれやら解らない。

それに…、

「…ねえ、あれ男の子じゃない？」

「可愛いー。彼女へのプレゼント選んでるのかな？」

「…案外自分の趣味なのかもよ」

「ヤダー」

周りの女性客の視線と好奇心が、痛かった。

（は、早く買って出よう！ 早く！）

平助は勇気を振り絞り、同じく自分に視線を向けている女性店員の所に向った。

「あ、あの！」

「はい。何かお探しですか？」

「あ、あの…チヨ、」

「ちよ？」

「『チヨコラツチュ』のグッズって、どこにありますか！」

「……………」

店員が、困ったように黙り込む。

次の瞬間、平助と店員のやりとりを聞いていた女性客の一人が吹き出し、

それを皮切りに、

店内が、爆笑の渦に包まれた。

「チヨ、チヨコラツチュって…（笑）」

「ヤダーもう可愛いー！」

「何かの罰ゲームなんじゃないのー？」

「え？ ええ？」

うるたえる平助に、

「お、お客様。申し訳ありませんが、」

女性店員が、笑いを堪えながら教えてくれた。

「そのような可愛いお名前のカラクターは、いませんよ？」

「……………？ ……………っ！ そ、総司iiiiiii！」

平助は林檎のように真っ赤になった顔で、元凶の沖田の名を叫びながらファンシーシヨップから逃亡した。

女性店員並びに女性客達は、それを暖かな目で見送ったという。

「ぶひゃひゃひゃひゃっ！ やってくれるなー総司のヤロー」

「ちよっと！ 笑い事じゃねーよ新八つつあん！ オレ総司のせい

でえらい恥かいたんだぞ！」

次の日の放課後。

平助は体育教官室で永倉と原田相手に、昨日の顛末を語っていた。にしても、短時間でまた夕チの悪い悪戯を考え付くもんだな」

永倉のように爆笑することこそ無かったが、原田は沖田の容赦ない嫌がらせに逆に感心している。

「感心するなよ左之さん！」

「悪い悪い。でも、総司だって謝ったんだろ？」

「……すーげえ棒読みだったけど」

そう、棒読みで「ごめんごめん平助。間違えちゃった」と言っただけだ。

「ぜってえ確信犯だろ！」

「ぶははははっ！ いやあ、俺も見たかったなあ。平助が『チヨコラッチュ』って叫ぶとこ」

「新八つつあん！ 笑い事じゃねーっての！」

「まあまあ二人とも落ち着けよ。で？ 平助。俺らん所に来たのは馬鹿話をするためだけじゃないんだろ？」

原田に宥められ、藤堂がう……と言葉に詰まる。

まだまだ沖田は腹立たしいし笑い続ける永倉も恨めしいが、今はそれどころではない。猶予はあと二日しかないのだ。

「う……。そ、それでさ……もう総司は頼れねーし、二人の意見も聞いたこーかなって、思ってた……」

要するに、今度はこの二人にアドバイスを求めているのだ。

永倉の方はあまり当てにしていけないが、原田はけっこうモテるし、女の扱いが上手い。何か参考になるアドバイスを貰えるのではないかと、そう思ってた平助は放課後、二人がよく溜まっている体育教官室に顔を出した。

「新八つつあんや左之さんなら、どんな物を贈る？」

教え子に問われ、二人はそろってうーんと考え込む。

「あ！ 欲しいもんがわかんねーなら、いっそ現金とか金券にしち

まうつつーのはどうだ？ 絶対外さないだろーコレなら」

いつも金に困っている永倉が自信満々でそう言つと、

「馬あ鹿外しまくりだよ」

「新八つつあん最低ー」

原田と平助二人に速攻で否定された。可愛げが無いプレゼントにも程がある。

「じゃ、じゃあ左之はどうなんだよ！」

「そう…だな。…花、とか」

「は、花あ？」

そう。ミニブーケや、ちょっと頑張つて大きめの花束を贈る。花を喜ばない女の子はそうそういないだろう。だが、

「うつ…、花かあ…なんかキザっぽくて…うつーん…」

平助にはまだまだ敷居が高いようだ。

「ま、一番良いのは本人の好きな物を贈ることだな」

「好きな物？」

「そ。まあ相手の趣味に合わせるってこつた。例えば、確かに可愛いキャラ物を好きな女の子は多いが、千鶴はそういうのを持ってるか？」

「あ…、そういえば…」

千鶴がその手の物を持っていたり、身につけているところを見た事が無い。

「ということは、そういうのは千鶴の趣味とは違うんだろう。で、逆に日頃どういふのを身につけてる？」

「えーと…、わりと地味つつーか、シンプル？ …あ、結構和風っぽいのが多いかも！」

「でかした、それだ。そういうのを扱ってる店、教えてやるからよ。じっくり選んで来いよ」

彼女のことを想いながら、と微笑う原田に『大人の余裕』的な物を感じ、平助は、

（…左之さんって『大人の男』って感じだよなあ。最初から左之さ

んに相談すれば良かった)

と、最初に沖田に相談してしまったことを深く深く後悔するのだった。

原田に教えられた店は、想像していたよりもこじんまりとしていた。

それでも落ち着いた内装と静かな店内は、慣れないせいで少しの居心地の悪さを感じても、そう悪いものではなかった。

(一口に和風って言っても、色々あるんだなー)

平助はきよきよと興味深く、店内を見渡す。

中には茶器や茶葉など、茶に関する道具を置いてあるスペースもある。

(あいつ日本茶が好きだしな…茶碗つてのもアリか?)

そう思っただけで近付いてみる。何となく、渋くて地味なものばかりかと思っていたが、中には白地に薄いピンクで桜の花弁を散らせた可愛らしいデザインの物もあった。

(でも、あいつも自分の茶碗持つてるし…)

ちなみに、千鶴と薫とついでに平助の茶碗は色違いのお揃いの柄だ。数年前、千鶴が日本茶に凝りだしたときに、よく一緒にお茶を飲むからと兄と幼馴染の分までお揃いで茶碗を買ったのだ。

(お茶っ葉は…あいつの方が詳しいし。オレよくわかんねーし)

それにも、自分の選んだ茶葉が千鶴の好みに合わなかったら、なんか嫌だし申し訳ない。

(ううーん…、これはこれで結構悩むなあ…)

悩みながら、平助は店内をゆっくり歩き回る。

そして色々な物を一つ一つ手に取り、あれでもないこれでもない
と、選ぶ。

きつと喜んでくれるだろう千鶴の、笑顔を思い浮かべながら。

「…千鶴、今いいか？」

コンコンと、ドアをノックする音。

そして聞きなれた幼馴染の声に、千鶴は読んでいた本を閉じ、ドアを開ける。

「どうしたの？ 平助君」

今日のように、お互いの家の夕食が終わってから平助が遊びに来るのはよくあることだ。

しかし、今日はいつもと少し様子が違う。

「いや、違って、その…これ！」

「え？」

突然小さな紙袋を手渡され、千鶴はきよんとする。

「今日、おまえの誕生日だろ。それ、プレゼントだから」

「え。あ、ありがとう！ 平助君」

開けて良い？ と問われ、平助は「お、おう」と頷く。

何だか無性に照れくさかった。

「き、気に入らなかつたら…ごめんな…」

店のロゴの入った紙袋の中に、綺麗にラッピングされた包みが一つ。

その包みを丁寧に丁寧に開けていくと、白い箱が一つあって。

「…わぁ…」

「その、お、おまえに合うと思って！」

中には、小さな桜の花と蝶の飾りがついた簪が一つ、入っていた。

「か、簪って、着物とかじゃなくても合うって、店員さんが言ってます。おまえ、髪長いし、絶対、合うから」

「すごく可愛い…」

千鶴はさつそく、緩く纏めてあった髪を解き、さつとおだんごに纏め直して簪を挿した。

黒髪に、薄いピンクの桜と赤い蝶が良く映える。

「…に、似合うかな？」

少し恥ずかしそうに尋ねる幼馴染の少女があまりに可愛くて、

「！ お、おう！ も、ばっちし！ すっげー似合ってる！」

顔を真っ赤にしながら、何度も何度も頷くことしかできなかった。

「ありがとう、平助君。大事にするね」

「…へへ。今度さ、それつけて出かけよーぜ。一緒に」

「うん！」

そうだ、この簪を買ったあの店に、千鶴を連れて行こう。

きつと喜ぶだろうと、平助は目の前で嬉しそうに笑う千鶴を見つめながら、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5880u/>

君に咲く花

2011年9月1日04時57分発行